

弔

辭

小川先生のスカウト歴六十二年間はまことに本物でありました。その後半の三十三年間をご一緒に頂けた者として、またスカウト上がりの現役リーダーの中で最年長としての私が、スカウト関係を代表いたしまして、弔辞を述べさせて頂きます。

小川先生の偉大なスカウト歴につきましては、「小川玄諦先生Scouting History」を先生が好まれた「うす青色」に印刷しまして配布いたしました。時間の関係上、これで省略させて頂き、先生の口癖の内、ふたつばかりを思い出としてお話をすることをお許しください。

小川先生の口癖のひとつは『わたしは今まで人を指導してきたことはありません。Suggestionが大事で、相手に教えるのではなく、学んでもらうのです』とおっしゃっておられたことです。そしてリーダーになればみな対等だと、上下関係を区別されなかつたことは、ややもすると上下関係を厳しくしそうなボーイスカウト活動にあつて、本当に大切なことを自ら示されたと思います。おかげでいわゆるスカウトからの叩き上げのリーダーでありました私は、ともすると上下関係にあぐらをかいていたかも知れないところ、小川先生によつて、リーダーの肝心を学ぶことが出来ました。そして宗祖のお言葉通りの弟子は持たぬと、親子以上の隔たりのあります私をご自分と対等に扱つて下さいました。もちろんリーダーという立場を離れたら我が子のように、子供達は孫のように思つて可愛がつてくださいました。

口癖のふたつ目は、『スカウティングの原理・原則を外れてはならない』と。『今の日本連盟は形式ばかりにとらわれ、本当のスカウティングではないねえ』とも。『名誉欲はあっても、名誉は失われている。「ちかい」通り名誉にかけているか、つまり本当に信頼されているか』とも、おっしゃつておられました。

長休寺の裏にありますプレハブ「ハウス長休」の使い方が乱れていると残念がつておられた際、『私がリーダーに厳しく注意いたします。スママセン』と申しましても、「その必要はない、いうて聞くぐらいなら、スカウティングはいらない」と原点の「ちかい・おきての実践」が出来ておらんことを嘆かれて、誠実さが育たない現代社会こそスカウト活動が必要だと、黙々と後かたづけをされておられ、『本当のスカウト活動は、集会にあるのではなく、集会から次の集会の間にこそある』とも、おっしゃつていたのが忘れられません。

先生は三月十一日未明、静かに息をひきとられました。奥様はご自分の知らない間にと残念がつておられます。ですが、先生は最後まで、いやずっとスカウトだと身を持つて示されたと思います。「人のお世話にならぬよう。人のお世話をするように、そして報いを求めぬよう」これを実践されたのではないでしょうか。

小川先生は今後もスカウトと俱にいらつしやいます。お亡くなられたときの目を閉じておられるお顔は、会議のそばで腕を組んで居眠つてられるお顔のままでです。この先も見守つてやつて下さい。リーダー仲間として、このほかの口癖も忘れないで、お預かりしてますこのWood Badgeとともに、先生のお心を伝えて行きたいと思います。

今日のところは、裏庭の沈丁花の花の香りとともに一先ずお別れといたします。
本当にお世話をになり、そして可愛がつていただき有難うございました。

平成五年三月十四日

スカウト関係代表

日本ボーイスカウト京都第三十八団
シニアースカウト隊 隊長

末 吉 央 伯